

Title	ヒンディー語の重層的統語構造
Author(s)	西岡, 美樹
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3187665">https://doi.org/10.11501/3187665</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	西岡美樹
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第11号
学位授与年月日	平成13年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ヒンディー語の重層的統語構造
論文審査委員	主査 教授 溝上 富夫 副査 教授 近藤 達夫 副査 助教授 高橋 明 副査 教授 藪 司郎 副査 助教授 松村 耕光

## 論文の内容要旨

本論文では、従来のヒンディー語の伝統文法・規範文法では説明されることのなかった、語を操作する論理形式という層構造に焦点を当てて、ヒンディー語の統語構造および機能(文法関係)の重層性を解明していく。

第1章では、統語分析に当たり、ヒンディー語の品詞分類をし、ヒンディー語の構造的な特徴を捉えるため、基本的なヒンディー語の構造をメタ言語化している。特に動詞とコピュラ動詞の複合により現在時制を表わすヒンディー語は、コピュラ動詞以外にも別の動詞を複合させることがある。一見、線的にみえるこの動詞連続の層的な側面を概観するものとして、命題と時制・相・法が織り成す構造を、日本語の動詞連続との構造対比に照らし合わせて、核と演算子という構造概念で説明を加えている。参照のため、ヒンディー語と日本語の動詞のパラダイム表も挙げてある。

第2章では、第1章でメタ言語化した基本文型に従い、単文構造を、具体例を挙げながら観察している。ヒンディー語には、構文として普通の平叙文(名詞述語文、形容詞述語文、自動詞文、他動詞文、存在文)の他、与格構文、日本語では観察されない能格構文が存在する。能格構文は、ヒンディー語の場合、目的語を持つ他動詞文の他動詞が、完了分詞になる場合にのみ現われる構造である。与格構文は、行為者を与格にした構造であるが、これは、日本語のように与格専用の動詞を持つわけではなく、抽象名詞と一般的な自動詞により表わすものが多数である。

第3章では、名詞修飾構造を取り上げ、統語類型を列挙し、構造中に内在する文法関係を詳細に観察している。構造上の特徴として、ヒンディー語には修飾部をヘッド名詞の前に置く前置型と後に置く後置型がある。基本的にSOV語順なので、ほとんど修飾部が前置されるが、唯一修飾部が後置されるのは、定形節、すなわち関係詞、同格接続詞を用いる構造である。この構造と相関的なものが、この定形節を非定形節に変換した上で前置する構造である。しかしながら、この変換には、文法関係の制約がかかっている。

この2つの構造以外に、文法関係が二重になる構造として、動詞派生名詞をヘッドに持つ構造がある。文が句と化すこの構造は、動詞(V)に当たるのがヘッドであり、属格後置詞でつながれる名詞PredN(Gen)に主語(S)もしくは目的語(O)という文法関係が内在する。自動詞出自であれば主語、他動詞出自であれば目的語が内在する。前者は、斜格語節に使用され、後者は、文の目的語として使用される。また、他動詞出自の名詞の場合、主語(S)がPredN(Gen)に内在し、目的語であった対象は、後置詞を使用した斜格名詞句になる。

第4章では、複文構造と題し、単文が2つ以上から成る集合体を定形節型(Type I)、非定形節型(Type II)に分け、例文を観察し分析を行った。前者は接続詞を使用したものであり、後者は従属側の単文を非定形節(斜格名詞句や副詞使用の斜格形分詞)に変換したものである。これらも互いに構造的な相関性があるものである。

第5章から第7章までは、複文の一種として、単文が別の単文に埋め込まれた述語複合を扱っている。まず、第5章では、名詞と動詞の述語複合を取り上げたが、名詞編入型として「数学の勉強をする」型と「数学を勉強する」型の二つの型が観察された。前者は、第3章の名詞修飾構造で観察した不完全名詞句が定形動詞の目的語として使用されるものであり、後者はその不完全名詞句が二つに分かれ、対象であるものを属格以外の格標示をし、抽象名詞に当たる動詞派生名詞を定形動詞側に編入するものである。それぞれ、半名詞編入型、名詞編入型として分類した上で分析を行ったが、ヒンディー語は半名詞編入型の表現をするものが多い。

また、名詞編入型以外に、「医者になる」、「馬鹿にする」のような「に+なる/する」型の構文を述語複合型として扱っている。これは、命題である名詞述語文を第一層の「なる/する」の主語もしくは目的語に埋め込んだ二層構造を成すものになる。一次元的には述語が連続する型であるが、名詞述語文の埋め込みによる二層構造である。認知構文もこの型に入るが、これらは、埋め込み側の名詞述語文の主語(S)を第一層の目的語(O)にし、対格標示をした上で、述語名詞を失業者にしてしまうのが特徴である。

ヒンディー語では、名詞と動詞を複合する場合、構造が大きく異なり、文をあらかじめ属格による不完全名詞句にし、これを第一層で目的語にする構造と、名詞述語文を主語、目的語に埋め込む構造の二つが存在する。この異なる構造は、以下の形容詞、動詞との述語複合の基本的な論理構造となる。

第6章の形容詞と動詞を複合したものについては、「動詞+形容詞」型と「形容詞+動詞」型の二つに大きく分けて、その構造を分析している。前者については、動詞の形態が斜格になり後置詞を伴うものと、後置詞をなくした $\phi$ 格の斜格形になるものが存在する。後者の述語複合型は、先の名詞複合と同様の統語構造を構えるものであり、第一層の主語、目的語に埋め込まれる命題が、形容詞述語文に変わるのである。埋め込み側の形容詞述語文の主語 (S) を第一層の目的語 (O) にし、対格標示をした上で、述語形容詞が失業者になる。

第7章の動詞と動詞を複合したものも、先の構造に従い、複合動詞と動詞複合の2つの型に分けた。複合動詞として扱ったものは、動詞の語幹と定形動詞の複合形式で、2つの動詞が揃ってはじめて意味を成すものである。つまり、これは、一次元的には動詞連続であっても、ほぼ一体として V の機能を果たすことになる。一方、動詞述語複合は、動詞述語文が第一層の主語、目的語に埋め込まれた二層構造になる。先行動詞の形態は、語幹、不定詞、未完了分詞、完了分詞がある。語幹と定形動詞の複合は先の複合動詞にも観察されるが、動詞述語複合の場合、後続動詞が、本来の意味ではなく漠然化したものになる。ヒンディー語の代表的な後続動詞には、‘ jānā ’ 「行く」が挙げられる。これは、漠然化されると「行為に至る」というニュアンスを生むことになる。このような動詞がヒンディー語にはいくつかあるが、それぞれが、元の動詞に関連したニュアンスを生むものになるのである。不定詞の場合は、形態が直格であれば名詞性が強いものとなり、目的語そのものとして機能する。しかし、不定詞の斜格形を取る場合は、第一層の主語、目的語への埋め込みになる。特に目的語に埋め込まれる場合は、第二層の命題になる動詞述語文の主語 (S) は、第一層で目的語 (O) になり、不定詞斜格形は失業者になる。不定詞が斜格形になるのは、命題が埋め込まれた結果、文要素として機能しなくなったことを示すためである。この構造を取る代表的な動詞 ‘ denā ’ 「与える」は、許可を表わすものとされるが、一見、論理的な「彼に水を飲むことを与える。」という一次元的な捉え方をすると、不定詞が直格でくるはずである。しかし、斜格になっているのは、埋め込み文の述語が失業者としての立場を取るからである。先行動詞の形態が未完了分詞、完了分詞になる場合も、形態が直格と斜格に分かれる。斜格形は未完了もしくは完了の状態であること保持し

た副詞的用法であり、文要素としては失業者である。同じ埋め込みにより、主語に性・数一致する直格形も同時に存在するが、両者の意味区別には、さしたる違いはないようである。これらの後続動詞の意味も漠然化したものが多い。代表的なものは ‘rahnā’ 「(ずっと) いる/ある, 続く」, ‘jānā’ 「行く」である。

また、もう一つ接続分詞 ‘-kar’ を先行動詞の語幹に付加したものがあるが、日本語の「行って来る」のようにどちらの動詞も本来の意味を保っているものを表わす。

第8章では、接辞を持つヒンディー語の使役と、同じく使役の接辞を持つ日本語の使役を、統語構造分析に基づき、論理展開の共通性を探る。ヒンディー語も日本語も、英語のような独立した動詞(‘make, cause, get, have’等)を用いるのではなく、接辞を用いるが、この接辞自体を動詞の機能を持つものと見立て、その目的語として、別の動詞述語文を埋め込んだものと考え、ヒンディー語も日本語も「その状態にする/その状態を作り出す」という具合に解釈できる。実際の行為者の意を介さない強制性が生じるメカニズムになる。本論文では「する」型使役と呼んでいる。もう一つ、日本語には容認もしくは強制を表わす「～に…させる」という使役接辞を使用した表現がある。この場合、ヒンディー語では、第7章の許可を表わす不定詞斜格形と動詞 ‘denā’ 「与える」を複合する表現になる。これと同じ複合形式を持つものに動詞 ‘pānā’ 「得る」があるが、日本語の「させてもらう」に当たり、埋め込みの命題が使役接辞を複合したものに訳される。ヒンディー語の不定詞には使役接辞が付いたものが使用されるわけではなく、これは日本語の使役接辞から生じる容認の意を利用した意識である。ヒンディー語のこの構造は、「私は(私自身が)行くことを得た。」となり、日本語の自分以外がする行為を自分がもらう場合に使用する「してもらおう」とは違う意味になることが、ここでは明らかになっている。

第9章では、統語構造の範囲内にある談話要素について、それらを使用した例を挙げ、さらにヒンディー語以外の南アジアの言語でも観察される与格後置詞の直接目的語への付加について論じた。他の後置詞にも取って代わり得るこの与格後置詞が、日本語のテーマ性を付与するマーカー「は」と酷似した機能を持つという仮説を立てるに至ることになる。

第10章では、本論文の分析法で明らかになった統語構造および文法関係の重層性をまとめた。また、第9章で論じた談話要素にまつわる層を試験的に統語構造図に含め提示している。

本論文の主眼は、言語運用を試みる際に必要となる語の配置による論理形式を統語構造図に示し、ヒンディー語における言語能力の規則を解明することにある。線的なストリングで捉えられがちな言葉も、実際は命題の複合から成る層構造を持つものであり、ヒンデ

ィー語の論理形式とわれわれの母語である日本語の論理形式の間にある共通点もしくは相違点を同時に明示することで、われわれが外国語としてヒンディー語を学ぶ上での手がかりにもなることを同時に期するものである。

## 論文審査の結果の要旨

ヒンディー語は印欧語族に属するとはいえ、長い歴史的変遷の過程を経て、屈折変化がきわめて簡略化され、言語接触により膠着語的要素が加味された結果、日本人には馴染みやすく、比較的学习の容易な言語とみなされてきた。

しかしながら、平面的にみると一見簡単そうに見える構造も、その機能を合わせて考えるとき、簡単には説明できない現象が多くみられる。かなりの量にのぼる過去の共時言語学的研究書からは、それぞれ断片的な解明はなされてはいるが、なお完璧な解明がなされているとはいえないもどかしさを、この言語の学習者はつねに感じていた。

本博士論文は、こうした先行研究書の成果を踏まえながらも、その限界に挑戦し、それを乗り越えようとした意欲的な労作である。

論者はヒンディー語の重層的構造を従来の平面的な視点ではなく、立体的な視点から解明しようとした。たとえば、複文構造を定形節型 Type I と非定形節型 Type II に分けて分析したり、述語複合を名詞編、形容詞編、動詞編に分類して精緻な分析を行っている。名詞との複合形式を名詞編入型（『数学を勉強する』型）と半名詞編入型（『数学の勉強をする』型）に分け、ある種の名詞は動的な動詞をとるか静的な動詞をとるかで「を」格表示が異なる事を指摘した。

本論文の中核をなすのは、なんといっても動詞に関する記述であろう。これは量的にも他を圧倒している。その中でも従来細かいことでは分からないまま放置されていたきらいのある使役構文と複合動詞の分析に、日本語と対比させて随所に納得のいく解釈をほどこしている。たとえば、「してやる」「してもらう」とヒンディー語の対応文の対照等興味ある事例がちりばめられていて読者の興味をひきつけずにはおかない。

元来与格表示機能をもつ後置詞 *ko* が「定性」を示すために直接目的語に付加される現象は欧米の学者に指摘されていたが、もうひとつそれだけではすっきりしない例に接することがままあったが、論者はこれを定性の機能よりは、テーマを付与する機能のなかに含まれるべきものと考えている。日本語話者にして初めてできる提言である。

本論文のすぐれている点を箇条書きにすると、

(1) ヒンディー語はいうに及ばず他のインド諸語でもこれほど詳しく重層構造に迫った類書はないと言う点で希少価値がある。

(2) 補助動詞のほとんどすべてを網羅しており、その情報量の豊富さは他の類書の追従を許さない。例文は小説、物語、日常会話や映画の科白からもとられていてすべて適切である。

(3) 重層的構造自体は新発見とはいえないまでも、これを極めて組織的に記述し新知識を提供した点で価値がある。

(4) ヒンディー語の補助動詞の用法の意味の記述は正確無比である。

(5) 論者は意識していないが、記述文法を推敲しているうちにおのずから歴史に引き込まれていき、動詞の元の意味を考察しながら、演算子としての意味を論じている。これは歴史言語学にとってもおおいに利用価値がある。

(6) 本論文はヒンディー語と日本語の対照研究が目的ではなく、あくまでヒンディー語の構造を解明し、それを説明するための手段として、母語である日本語(ならびにその方言)を使用したのであるが、結果的には対照研究上のよき方法論も提供したといえる。その結果、ヒンディー語を学ぶ人、ヒンディー語の教科書を書く人にとってもこの論文の成果は利用できるものである。

反面、次のような欠点も指摘された。

(1) 図を用いた論述は分かりやすい面があるが、繰り返しの必要はなかりうし、全体の論述がやや冗長になったきらいがある。

(2) 語根、語幹、語彙化、三項動詞、膠着接辞、ヒンディー語転写法等の術語の用い方に多少正確さに欠ける箇所がある。

(3) 既知のヒンディー語文法事項の説明がやや陳腐すぎるきらいがある。

(4) 参考文献は、圧倒的に英語とヒンディー語であるのは当然ながら、ドイツ語でも、Paul HackerやDieter B.Kappの著書もすぐれた著作なので、できれば参考文献に挙げた方がよかった。

その他にも、このような大胆な仮説の提示には、当然多くの批判の余地があろうことを認めてもなお、本論文の学術的価値が決して減じるものではない。このことは、言語学を専攻とする者も、ヒンディー語を専門とする者も等しく、本博士論文を何の抵抗感もなく一服の清涼剤のようにさわやかな気分で読み終えたことで証明される。本審査委員会は、本論文が博士の称号を授与するに十二分に足る業績であるという点において、全委員の意見の一致をみた。